

弱さは悪か

— 家族介護における共振する「心」への考察 —

Is Weakness Evil : A Study of the Resonant “Heart” in Family Caregiving

(2023年3月31日受理)

中野ひとみ

Hitomi Nakano

Key words : 弱さ, 家族介護, 共振する「心」, 悪, 統合知

抄 録

本稿では、人間の「心」の弱さに焦点を当て、弱さは悪であるのかを検討した。家族介護で起きる非人道的行為をもとに、人間の「心」の弱さを考察し、加えて、社会福祉において統合知で、人間を観ることへの可能性へ言及した。

人間の「心」の強さの強調は、時に人間の分断を生み、また、弱さの表出し難さは、社会の生きづらさとなる。人間の「心」の強弱は、時として、どちらも問題となる。介護で起きる非人道的行為も、他者と関わることで、自己の「心」が動く。言い換えるなら、他者と関わらなければ、「心」は動くことは無い。他者との関わりが近ければ近いほど、「心」は振動し、共振する。共振は、他者との相互反映的であり、時にそれは、葛藤や軋轢を含む。

誰もが、強くもあり、そして弱くもある。その両方の「心」が、絶えず人間の中で流動している。人間が起こす事象、その内奥にある「心」を切り捨てることなく、社会福祉はその真理の探究を多くの学問領域と分野横断し、新しい発展を目指す学術的な拡充が必要である。これまで以上に、統合知として、社会の課題の解決策の模索や現代社会の課題を捉えていくことが、真のインクルーシブ社会の実現に繋がる。

1. はじめに

人間の「心」の弱さとは、何であるのか。そもそも、「人間は弱いのか」という問いに、「弱い」と答える人もいれば、「それは一部の間人だ」と答える人もいるだろう。反対に強い「心」こそが、人間にとって必要な「心」だと言い切れるかと言えば、それも即答に困る部分である。加えて、人間の持つ「心」の弱さが、悪なのかと言うと、これも返答に困るところである。

広辞苑によれば、弱さとは「力が少ない、強くない。」や「耐えうる力がない。」「働きが劣っている。」や「意志が堅固ではない。」とある¹。宮坂道夫(2023)は、人間の弱さについて、「人間の弱さの根本的な原因は、生きていることにあるとしか思えないからである。」とし、

また人間の脆さは、「高機能であることの代償らしい。」と述べている²。

これらから、弱き状態になることは、誰にでも当てはまると考えることが出来る。また、「心」の弱さは、その人間の健康状態とも切り離して考えることは出来ず、「心」のバランスは、身体機能のみならず、精神的、社会的等の多くの作用を受け、その上に成り立っていることは、WHOの健康の定義からも明らかである³。人間の「心」は、目で捉えることは出来ず、その「心」の状態は、その人間の心身健康を表す指標だという事がわかる。とりわけ、変化の厳しい社会において、他者との関係は、切っても切れない紐帯である。自己を取り巻く社会、そして家族と自分との関係と言うように、人間対人間の関係性は、生きている限り切り離せないものでもある。「心」

穏やかに、より善く生きることには、他者との関わりが少なからず作用し、一方で人間同士の関わりによって、その穏やかさを失うこともある。

人間は、他者との関係性の中で生き、互いの「心」が触れることで、共振する。共振とは、電気振動による共鳴と同じ意味をもつ⁴。人間同士の関わりも、「心」対「心」が触れることにより、互いの「心」の振動が伝わり、さらに共に振れを起こす。他者との関わりにより、共振した「心」は、時にそれは人間に幸福を齎す。一方で、その「心」は共振することによって、人間の弱さや悪を表出する。その「心」をどう考えていくべきか。

2. 研究の目的

社会福祉の課題において、人間同士の関わりによって起きる問題は、様々な場面で見聞する。虐待等、非人道的行為も、その一つである。近年、介護のなかで問題視されるのが、家族介護の末の介護殺人や、介護心中がある。毎年多くの介護殺人や介護心中がニュース等で報じられ、その度に支援やサービスのあり方が見直されるが、果たしてそれだけで良いのか。家族と言う関係性で起きる本課題は、まさに人間対人間の関わりによって起きた、社会福祉の課題である。これらの問題は、全て虐待として処理され、事例検討は行われるものの、その背景にある、人間の「心」の弱さや歪みの真理まで、社会福祉のなかで深化させることはない。

家族介護の問題は、人間同士の密接な関係性の中で起きた課題にも関わらず、その本質への検討は、いまだ十分ではない。他者と関わることで、人間の「心」は共振する。そして、それは時として、人間の弱さを悪として表出する。

本稿では、家族介護で起きる非人道的行為から、人間の「心」の弱さに焦点を当て、以下の点で検討を行う。他者と触れ合う事で共振する「心」から、人間の弱さは悪であるのかを考察する。加えて、統合知で人間を観ることが社会福祉領域において、さらに拡充が必要であると改めて問うための足掛かりとしたい。

3. 人間の弱さとは何か

人間の弱さは、悪であるのかは、前述したように返答に困るところである。それでは「心」の弱さは、社会の中で、どのように考えられているのか。

近年では、変化の厳しい社会に対応するため、逞しく生きる力や、強い「心」が必要だと耳にすることがある。反対に、弱さという単語自体が、どちらかと言えば、否定的な表現で活用されることが多い。例えば、弱い人と言う括りで、高齢者や障がいを持つ方、そして子どもや女性を纏めて呼ぶ、「弱者」という言葉がある。当然、この言葉には、社会的に弱い立場にある人たちを、守るという大きな意味を持っている。何か有事の際、最優先で、守らなくてはならない人たちであり、判別しやすい括りでもある。

一方で、弱者という言葉は、時として、相手に弱さのレッテルを貼り、ラベリングしてしまうことになる。海外においては、弱者という括りではなく、人間が何らかの要因で弱っている状態を指す用語に、Vulnerableという言葉がある⁵。Vulnerableは、脆弱性を意味する言葉であり、人間の脆弱さは誰もが持ち、病気や障害、社会的な権利の喪失、生きることへの悩み、心身の弱き状態となることは、誰にでも当てはまることを表している言葉でもある。

どちらの状態にもなり得ることを考えると、強さも弱さも、人間が持つ力である。弱さの出現は誰でもあると、Vulnerableから捉えることが出来る。また、人間の強さや弱さは、当然のことながら、そのバランスは崩れることがある。身体機能の変化に伴うもの、そして、他者との関係性の中で、私たちの「心」は強くも、弱くもなる。他者と共振し、生きている人間は、強い時もあれば、弱い時もある。他者との触れ合いで、人間同士のパワーバランスが崩れた時、違う問題が表出する。強さの強調は、時に人間の分断を生み、また、弱さの表出し難さは、社会の生きづらさとなる。人間の「心」の強弱は、時として、どちらも問題となる。社会福祉で取りあげる家族介護で起きる問題も、人間の「心」の強弱と無関係とはいえないのである。

4. 介護により共振する「心」

4-1. 家族介護の課題

超高齢社会において、介護の問題は我が国でも最重要課題の一つである。支援者不足のみならず、他者に関する支援の難しさは、様々な問題を引き起こす。

介護支援とは何か、一言で述べると、人が人に関わり、成り立つものが介護である。支援する側が献身的に、誰かを支える直接的な行為そのものが介護であり、人の関わりがあるからこそ、成り立つ。そのため、介護支援での問題は、支援する側とされる側に大別し、課題を考えることが出来る。支援をされる側は、自分らしく、より善く生きる価値を求め、そして支援する側は、支えるためのスキルだけでなく、相手を敬い、尊厳ある対応が必要とされる。当然、その関係性には、上も下もなく、人間対人間の関わりが必要である。

しかし、時として、その均衡は崩れ、大きな問題へと発展する。その一つが、支援する側が起こす、虐待などの非人道的行為である。弱きものたちへの支援とは、時に、人間関係のバランスを崩し、力あるものが、力無きものへ行う非人道的行為へと発展する。どれだけ、制度施策が整備されても、こうした問題は無くなることはない。むしろ、減ることもない、社会福祉の溝でもある⁶。

特に、家族介護で起きる非人道的行為は、例えその直前まで、愛が存在していても、相手に被害を及ぼした時点で、犯罪として扱われる。そしてそれは、虐待として処理される。人間が人間に関わることで、起きる介護の課題は、他者に自己の「心」が触れることで発生する。他者と関わることで成り立つ介護は、例え、家族であっても、その責務は計り知れず、大きな負担となる。

介護は、支援する側の人生と、そして支援される側の生きること、その全てを請け負うのである。支援に懸命になればなるほど負荷はかかり、「心」は疲弊する。家族という小さな紐帯は、その密接さ故に、両者の「心」が常時触れることで、共振する。他者との関わりで、共振する「心」の振りが大きければ大きいほど、人間は穏やかさを失っていくのかもしれない。他の誰かに関わらないと起こらない課題が、介護で起きる虐待の真相と捉えることが出来るのである。

4-2. 共振する「心」

人間は、他者との関わりの中で生き、共に触れることで、「心」が動く。そして、その関係性の深さ故、大きな問題となって、社会へと表出する。介護で起きる虐待等の非人道的行為も、他者と関わることにより、自己の「心」が動く。言い換えれば、他者と関わらなければ、「心」は動くことは無いと、言えるのではないか。それでは、何故、他者との関わりで「心」が動くのか。

自己の心身の状況、他者との関係、周囲を取り巻く状態や状況、関わるうえでの感情等、様々な要因が考えられるが、人間対人間の関わりが、あるからこそ起きることには、違いはない。介護で起きる虐待等の非人道的行為は、まさに人間対人間の関わり故に、起こる課題である。家族という小さな紐帯の関係は、共に「心」が触れ、振られることにより、プラスにもマイナスにも、人間の「心」は作用するのだ。他者と共に動く「心」、共に振られる「心」とは何であるのか。

中村雄二郎(1997)は、共振について、リズムや振動の説明において、「物理現象のなかにもみられるにせよ、生命や生命体にとってとくに重要な現象」⁷とし、「生物共通のサーカディアン・リズム(生物の体内時計のリズム)をはじめ、さまざまな周期のリズム振動が多数存在している」とし、「それらリズム振動は別々に存在しているのではなく、互いに〈引き込み〉(entrainment)によって、共振し豊かになる。」⁸と述べている。つまり、生命ある人間は、多くの関係性の中で、互いの振動に触れることで、その振動は、さらに互いに振れを起こし、共生している。

また、森下雅子(2007)は、フィールドの当事者と調査者をもとにした研究から、共振の概念を、他者との間で実際に生じている連動であるとし、『そこに意志があっても、必ず「変容」が伴う』⁹としている。また、共振の特徴として、「①相互反動的である。②動的でダイナミックな運動。③葛藤や軋轢を含んだものである。④当事者と調査者のローカルな協働的な実践である。」と4つを挙げている。そして、『「共振」は相互反動的に変容する運動であり、協働的な営みであるが、葛藤や軋轢を含んだもの』⁹であると纏めている。

森下が捉える共振は、中村が述べる共振の大きな概念をもとに再考されており、互いの振動が共鳴、共振し、

変容を起こす。そして、その共振は、人間の葛藤や軋轢を含み、互いの「心」の反映だと理解することが出来る。共振した「心」が、その後どう変容するかは、不確実ではあるが、人間は他者と共に生き、関わりがあるからこそ、「心」が振られる。他者との関わりが近ければ近いほど、人間は知らぬ間に、相手と連動・振動し、動き、共振すると考えることが出来る。

ここで注視すべき点は、他者と協働し、共に振られる「心」が、誰にでも起こることならば、そこから悪へと傾斜する人間と、踏みとどまれる人間の違いは何にあるのかである。悪の出発が人間の「心」の弱さならば、裏を返して、弱さは、人間にとって悪なのかである。再考すべき点は、こうした介護の課題は、人間の「心」の真理を含み、他者に触れ、共振することで起きた問題と考えることが出来る。他者との関係性のなかで生きる人間の「心」の内奥にある弱さを、どう捉え考えていくかである。

なお、本稿は、非人道的行為を起こした人間を肯定するものではないことを加えておく。他者と触れることで、誰でも起こすかも知れない非人道的行為、その「心」の真理をどう考えて行くかである。むしろ、こうした社会福祉の溝の課題は、十分検討すべき内容であり、事実の裏にある「心」、その真理をどう考えるか問うことが重要なのである。

5. 弱さと悪

5-1. 介護で動く「心」

人間は、他者との関わりによって、「心」が共振し、動く。その関わりが、密であればあるほど、「心」が振動し、共振する。「心」と「心」が振動し、共振して起きる介護の事象は、観えない強者と弱者の関係でもある。

介護の原則でもあり、相手を敬うや、尊厳ある対応が必要であると、どれだけ綺麗な言葉で纏めても、見えない上下の関係は、必ず存在する。とりわけ、家族介護の関係性は、密接が故に、「心」は常に共振する。小さな紐帯は、人間の「心」を、大きく振り、理性が精神を上回った時、「心」が動く。振動し、共振する振り幅が大きければ、大きいほどに、「心」は、穏やかさを失い、相手を破壊することになるのかもしれない。例え、手前まで

愛情や、知性や理性が存在しても、「心」は動く。共振した「心」が歪み、悪へと変容した時、非人道的行為は起きるのだと考える。

しかし、再考すべきは、誰もが最初から悪を起こそうとは思っていない点である。それにも関わらず、家族という紐帯で、それは起きる。人間が起こす悪は、片方の力だけでは成立はしない。悪は、悪を起こす側だけの力だけではなく、それを受ける側の人間に、それを跳ね返す力がある時には、悪は成立しない。反対に、受ける側が、跳ね返すだけの力が無い、もしくは低下している場合には、悪は成立する。人を傷つける行為は、人間の力の強弱にも大きく関わる。そして、悪を起こし、弱者を傷つけた者は、強者ではなく、その時点で、人間の「心」の弱さの出発点なのである。

5-2. 人文学から考える「心」

人間の「心」について、これまで多くの人文系学問の中で検討されている。ここでは、統合知として古代キリスト教哲学者、アウグスティヌスの著書『告白』の極一部に触れ、人間の「心」を考えてみたい。アウグスティヌスは、自己の行状から、人間の「心」の真理を探究し続けた人物であり、出村和彦(2017)は、「心」の哲学者としている¹⁰。

アウグスティヌスは、人間は、もともと善、善きものだとし、恐怖のない安穏な状態を求め、生きているとしている¹¹。人間が起こす悪には、「悪をなす」という行為と、「悪をこうむる」の2つがあるとし、これらは、それぞれ区別して考えることが重要としている¹²。「悪をなす」とは、その言葉の通り、悪を行うこと、一方で「悪をこうむる」は、何らかの要因で悪を起こしてしまうことである。また、人間が悪を起こしてしまう要因に、アウグスティヌスは、欲望と恐怖の関係をあげ、人間は、自らの欲望で何かを追及するためだけで、悪を起こすのではなく、自己の生きることを妨げられる場面において、災いから避けるための悪があるとしている¹³。

つまり、アウグスティヌスは、自己を護るが故の悪もある、としているのである。自己にとっての生きることの妨げが、自らの善を護るために悪を起こしてしまう。人間は、もともと自己の善、恐怖のない安穏な状態を求め、生きている。しかし、なんらかの要因で窮地に陥つ

た時、悪を起こす。人間に降りかかる恐怖は、「心」を蝕み、自己を護るための行為が悪として、外側に表出する。これらは、家族が起こす、非人道的行為の悪にも通じるところである。当然、人間が罪を犯した時点で、それはどのような理由にしろ、許されることではない。

人間にとって、快く生きることが障害された時、それが恐怖と変容し、悪へと傾斜する。さらに、アウグスティヌスは、「欠陥をもつ一方の存在者がそれをもたぬ他方の存在者を破壊しようと近づくとき、この近づくという事実において、すでに同等のものとしてではなく、自らの欠陥ゆえに弱いものとして近づくのである。」としている¹⁴。人間が起こす悪は、そこに人間の「心」が密接に関係し、その深層部の見極めが必要である。

このように、人間理解への深化には、統合知で課題を捉えていく必要性を、改めて問うところに繋がる。

5-3. 人間は、弱いのか、強いのか

人間は、他者との関わりによって、自らの快く生きることが障害された時、「心」が揺れる。誰もが、生きる状態を阻害されるような窮地に陥った時、穏やかさを失い、「心」の弱さが、表出する。その弱さの「心」が、次にどう動くかは、人間の内奥にある、自らの自由意志の選択である。

人間の「心」は、容易く、破壊的ともなり得る可能性を持つ。誰もが、強くもあり、そして弱くもある。その両方の「心」が、絶えず人間の中で流動している。それは、人間が、もともと弱さと強さの、両方を持っているからである。人間の「心」は、強さだけではない、弱き「心」もあり、少なからず誰しもが、大小の弱さや悪を表出し、生きている。弱さも自己の「心」であり、それを認める力こそ、人間の強さでもある。弱さは、人間の強さでもある。

弱さを表出し難い社会は、それが歪みを増長し、違う問題へと転化する。自己の弱さを認め、その弱さと共に生きること、そうした柔軟な考えが、社会のなかで深化されていくべきであり、人間を主軸とした真理の探究が、事象の答えへと近づくのではないか。

6. 社会福祉での統合知の視点

社会課題の解決策には、多角的な視点が必要である。中村雄二郎(1984)は、「近代科学の知にのっとった近代文明は、地球的な規模で人類の生活に大きな変革をもたらした。」と述べる一方で、「誰もほとんど例外なく、困難な受動的立場、受苦の立場に立たされることになった。」とし、「こうして、受動、受苦、痛みや、病いなど、人間の弱さの自覚の上に立つ知<パトスの知>が、あらためてかえりみられるようになった。」¹⁵としている。目に見える表面的な現実だけでなく、深層の現実にも目を向けて、人間を考えることも必要としている¹⁶。様々な事象を考えていく上で、科学的な知も当然重要ではあるが、それだけではなく、人間の内奥に潜む、重曹的意味を問うことも必要である。

これまで、社会福祉で起きる事象課題に対して、多くの科学的検証が行われてきた。人間が起こす事象、その内奥にある「心」を切り捨てることなく、どう考えていくかである。社会福祉は、多くの学問領域と分野横断し、その解決を図ってきたが、ますます複雑化を伴う社会課題に、さらに新しい発展を目指す、学術的な拡充が必要である。これまで以上に、他分野と架橋・統合し、社会の課題の解決策の模索が、望まれている。統合知である、「知の統合」とは、「異なる研究分野の間に共通する概念、手法、構造を抽出することによってそれぞれの分野の間での知の互換性を確立し、それを通じてより普遍的な知の体系を作り上げること」である¹⁷。

人間が起こす課題を、人間の「心」、その真理を見ずして、解決は有り得ない。介護で起きる非人道的行為を、虐待とひとまとめにしてしまう社会のあり方の見直しや、その他の問題も含め、人間の「心」の真理を捉えなおし、再考すべきではないか。その真理の本質を問うため、多くの知を統合し、今一度人間を主軸とし、多方面からの視点が必要ではないだろうか。

ひとつの課題に対して、多くの多角的、多面的な視点から人間を捉える。互いに影響しあう多くの学問が融和し、統合知の力で社会の問題を解決していくことが可能ならば、さらなる解決の可能性が広がるのではないか。これまで以上に各分野が並立するのみではなく、さらに強固に影響し合う、新しい発展を目指し、統合知の視点

を深化させていくことが、社会福祉に求められているのである。

おわりに

人間の「心」の弱さとは悪なのか、家族介護の事象をもとに、検討した。本稿では、人間の「心」の弱さの一部にしか触れることが出来ず、社会福祉の現実事象に照らし、人間の真理を追及することは、引き続きの検討課題である。

人間は、他者と関わることで、「心」が共振する。他者との関係の中で、共に「心」が触れ、振られることにより、プラスにもマイナスにも、人間の「心」は動く。他者と関わり、生きている人間は、その関わりがあればこそ、「心」は共振し、ぶれる。人間の外側に表出する行為は、紛れもなく人間の「心」の表出であり、自由な意志の選択によって創られている。

「心」は、強さばかりではない。弱さも人間の内奥にある。そして、それ自体は、誰もが持つ「心」であり、悪ではない。自己の弱さを認めることが、「心」の強さでもある。誰もが持つ、人間の弱さを認め、どう受容、どう共生していくのか。人間の「心」の弱さ、そして多様な価値が混在する社会を理解することが、より善く生きることに繋がる。弱さを切り捨てることなく、考え続けることが、全てを包摂する社会のあり方への答えに、繋がっていくのではないだろうか。

社会課題の複雑化とともに、解決策ばかりが先走るが、それぞれの学問領域の知の統合により、多角的視点の広がり、課題解決に繋がると確信する。多くの領域と架橋し、人間を捉えていくことで、新たな社会の価値を芽吹かせる。

人間の本性を問い、「心」を内観し、現代社会の課題を捉えていくことが必要である。それこそが、真のインクルーシブ社会の実現に繋がり、社会福祉の目指す道だと考える。

付記

本稿は、2023年3月4日に開催された、日本教育福祉学会・第12回研究大会、高千穂大学で発表した「弱さを

認める教育福祉—生きる力が目指す「心」の理解—をもとに、大幅に加筆修正を加えたものである。

【注】

1. 新村出（編）『広辞苑 第4版』、ページ参照2959.
2. 宮坂道夫（2003）は、人間の根本的弱さの原因を、生きていることとし、人間の弱さは、いくつもの側面を持ち、「生きている存在だけが持つ強さの代償」と述べ、人間の脆さは、高度な統合性ゆえの有限性の代償としている。ページ参照15-17.
3. 公益財団法人日本WHO協会による、「健康の定義」では、「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます。」（日本WHO協会訳）」とし、健康は不変のものではなく、時代や環境が変化のなかで、健康とは何かという真摯な議論を続けていくことが重要としている。
4. 新村出（編）『広辞苑 第4版』、ページ参照669.
5. 清野絵（2014）は、社会福祉におけるバルネラビリティな人々の定義や概念について、整理することが重要とし、一般的な弱さと社会福祉の対象における弱さは、違いがあるとしている。ページ参照22.
6. 社会福祉の溝とは、筆者が仮称した言葉で、現時点において、法や制度からどうしても零れ落ち、救えない人たちや、支援が十分に行き届かない、もしくはそこまで行き着かない人たち、また、その置かれている状態をまとめ、表現した言葉である。
7. 中村雄二郎（1997）は、リズムや振動や共振は、生物や生命体にとって、とくに重要な現象としている。ページ参照191-192.
8. 中村雄二郎（1997）は、共振による引き込みは、自然や宇宙、空間的に相隔たった場所で、互いに響き合うようにして起き、無数の引き込みがあるとしている。ページ参照194.
9. 森下雅子（2007）は、共振は、フィールドワークを再定義するためのリソースであるとし、その特徴として、相互反動的に変容する運動で、協働的な営みであるが、葛藤や軋轢を含んだものとしている。

フィールドの当事者と調査者をもとにした研究で、その関係性には、常に揺らぎが生じているとし、共振を通して、問題の所在が明らかになり、解決策が見出されるとしている。ページ参照163-170.

11. 出村和彦 (2017) は、自己の内面を深く探り、真理の探究を行なったアウグスティヌスを、「心」の哲学者としている。ページ参照 i-vii.
12. 泉治典 原正幸訳 (1989) 『アウグスティヌス著作集 3 初期哲学論集 (3) 自由意志 音楽論』, 自由意志, 第一巻, 第一章で、アウグスティヌスは、悪人のだけれども、自分の悪しき行いの創始者とし、悪しき行いには、欲情を伴う悪と、そうでないものがあるとしている。ページ参照19-22.
13. 泉治典 原正幸訳 (1989) 『アウグスティヌス著作集 3 初期哲学論集 (3) 自由意志 音楽論』, 自由意志, 第一巻, 第四章で、アウグスティヌスは、悪は人間の自由意志によって作られ、恐怖なしに生きることは、善人だけではなく、すべての悪人も求めているとしている。ページ参照28-34.
14. 泉治典 原正幸訳 (1989) 『アウグスティヌス著作集 3 初期哲学論集 (3) 自由意志 音楽論』, 自由意志, 第三巻, 第十四章で、アウグスティヌスは、強者が弱者を破壊するときの関係は、破壊は両者の欠陥か、強者の欠陥によるとしている。破壊は、どちらか一方が、それを欲しない限りは起こらないとし、非難すべきは、人間の本性における欠陥であるとしている。ページ参照186-188.
15. 中村雄二郎 (1997) は、パトスの知とは、近代科学の知の反対にあるものであり、人間の強さを前提とする近代科学の知が、蔑視し、排除してきたものであるとしている。ページ参照. 186-187.
16. 中村雄二郎 (1984) は、近代科学とは、物理学をモデルとした知で、その正しさを理論的に、証明、明示出来るのに対して、臨床の知は、同じような仕方では正しさの証明が出来なかったとし、臨床という、相互行為の場にふさわしい知、臨床の知とは、何たるかの回復が必要だとしている。ページ参照188-190.
17. 日本学術会議「提言 社会のための学術としての「知の統合」—その具現に向けて—」によると、学問分

野の連携による統合知の必要性について、「人類や社会の抱える複雑な課題の俯瞰的な解決を可能とする「知の統合」を実現するための「新たな挑戦」が、いま強く求められている。」としている。ページ参照 ii.

参 考 文 献

- 出村和彦(2017)『アウグスティヌス「心」の哲学者』, 岩波新書.
- 泉治典 原正幸訳 (1989) 『アウグスティヌス著作集 3 初期哲学論集 (3) 自由意志 音楽論』 教文館, 初版.
- 清野絵(2014)「障害者福祉におけるバルネラビリティ概念の定義」東洋大学 福祉社会開発研究所, 6号, 15-24.
- 公益財団法人日本WHO協会 「健康の定義」
<https://japan-who.or.jp>(閲覧日2023. 3. 10)
- 新村 出 (編) (1991) 『広辞苑 第4版』, 岩波書店.
- 厚生労働省「令和3年度「高齢者虐待の防止, 高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく対応状況等に関する調査結果」
https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000196989_00024.html(閲覧日2023. 3. 10)
- 厚生労働省「令和3年度使用者による障害者虐待の状況等」
https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000172598_00007.html(閲覧日2023. 3. 10)
- 中村雄二郎 (1992) 『臨床の知とは何か』, 岩波新書.
- 中村雄二郎 (1984) 『術後集』, 岩波新書.
- 中村雄二郎 (1997) 『術後集II』, 岩波新書.
- 日本学術会議 平成23年 (2011年) 8月19日 社会のための学術としての「知の統合」推進委員会「「提言社会のための学術としての「知の統合」—その具現に向けて—」
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-t130-7.pdf> (閲覧日2023. 3. 10)
- 森下雅子(2007)「フィールドと調査者の共振—地域における日本語支援の現場を例にして—」『実験社会心理学研究』 Vol146, No2, 16.

